

電子図書館を活用した多読教育および プレゼン教育の研究

A Study on extensive reading and presentation
education using an E-library

＜プロジェクト・メンバー＞

研究代表者

飯島泰裕^{†1}

Iijima Yasuhiro

研究分担者

寺尾敦^{†1} 上野亮^{†2}

Terao Atushi, Ueno Ryo

^{†1} 青山学院大学社会情報学部 教授

Aoyama Gakuin University School of Social Informatics, Professor

^{†2} 青山学院大学社会情報学部 客員研究員

Aoyama Gakuin University School of Social Informatics, Visiting Researcher

キーワード：電子図書館，多読，プレゼンテーション，教材，大学教育

Keywords: E-library, extensive reading, presentation, teaching material, university education

1. はじめに

大学では伝統的に初学者に対し、一冊の名著を対象に、背景などを考え深く読む「精読」、その分野の概要などを知るため、多くの本を短時間に読む「多読」の教育を行い、書籍から情報を得る様々な手法を学ばせてきた。しかし、多読は多量の本を持ち歩くことになり、通学時間が長くなる現況において、やりにくい教育の一つとして、敬遠されがちである。ところが、近年の ICT 技術の発展に伴う、スマートフォンやタブレット端末の普及、電子図書館の登場により、多読教育が可能となってきた。

こうした背景もあり、青山学院大学社会情報学部で

は、2013 年度～2015 年度の 3 年間、社会情報学部 1 年生の必修科目である「社会情報体験演習」の授業の一環として、電子図書館を活用した、多読教育を実践してきた（飯島他、2016）。2016 年度末には、2015 年度までの研究成果を踏まえ、旧来のシステムに代わり、新たに電子図書館システム LibrariE を導入した（飯島他、2017）。

LibrariE には、昨年度までに選書したコンテンツを含め、現在、社会科学系や自然科学系を中心に、337 の電子書籍が搭載されている。今年度は、これらの電子書籍を活用することで、「社会情報体験演習」における多読教育にも電子図書館を活用した。また、社会情報学部の独自コンテンツとして、プロジェクト演習入門の授業における、過去の発表資料を取りまとめた資料集、ファイナルプレゼンテーションの様子を

収めた映像資料といったコンテンツも搭載されている。そこで、昨年度に引き続き、プレゼンテーションの学習のためにも、電子図書館を活用している（図1参照）。



（青山学院大学社会情報学部，2017 より引用）

図1 電子図書館のトップページ

更に、現在導入している電子図書館システム LibrariEに加え、別の電子図書館システム KinoDenを導入した（図2参照）。LibrariEは大学1～2年といった、いわゆる初学者向けのコンテンツを中心に扱っており、大学3～4年生や院生、教員の研究活動をサポートするツールとして使うのには、あまり向いていない。そこで、学術書を中心に扱う KinoDenを並行運用することで、社会情報学部全体をカバーできる体制を整え、学部生と院生や教員の電子図書館の活用方法の違い等を見ていく。その上で、多読教育やプレゼン教育を含め、教育・研究支援全般を担うシステムとしての電子図書館の在り方を研究している。本



（青山学院大学，2018 より引用）

図1 電子図書館 KinoDen の蔵書検索結果

稿では、こうした目的の下、実施してきたプロジェクトの進捗状況、今後の実施方針を報告する。

2. プロジェクトの進捗状況

2.1 電子図書館を活用した多読教育

社会情報学部1年生の必修授業である「社会情報体験演習」の時間を通じ、電子図書館を活用した多読教育を実施した。多読教育に関しては、多読の必要性や電子図書館の使い方の説明等の講義部分は、2015年度までと同じ内容とした。一方、多読課題の内容は、課題を授業時間内で解く、読んだ書籍のキーワードを抽出する等、内容を変更した。具体的な違いは、表1の通りである。

表1 多読課題の実施方針の比較

年度	2015年度	2018年度
対象	・社会情報体験演習履修者247名	・社会情報体験演習履修者189名
利用システム	・MARUZEN-DL	・LibrariE
電子図書館の利用	・電子図書館の利用は任意	・電子図書館の利用は必須
課題図書	・課題図書の指定は無し ・電子図書館上には、グーテンベルグ21を500冊用意	・講談社ブルーバックス、講談社現代新書等、電子図書館に用意した書籍282冊 ・TOEIC対策のような問題集系書籍は課題図書から除外
課題期間	・2015/04/21～2015/05/08（18日間）	・2018/04/18（当日授業内）
レポート内容	・10冊の書籍を読み、1冊毎に3行程度の感想文を書く	・授業時間内に書籍を読み、1冊毎に、書籍に出てくるキーワードや3行程度の感想文を書く ・授業時間内に可能な範囲で、最大4冊までの書籍を読む

授業時の電子図書館の使われ方について、システムから取得可能な利用統計データを分析した。結果、本格的に多読課題に取り組み始めた「16時50分台」に貸出が集中し、以降は、本を読み終わった学生が順次、次の本を借りていく様子が分かる。また、他の時

間帯に比べ、「17 時 30 分台」～「17 時 50 分台」に、貸出が集中しているため、多くの学生達は、40 分～1 時間程度の時間を掛けて、1 冊の書籍を読んでいると推測される（図 3 参照）。実際、レポートの回答状況を見ると、1 冊～2 冊分の回答をした学生が 7 割近くに達している。なお、特に学生からの貸出回数の多かった書籍としては、『はじめたらやめられない自己分析ワークシート』、『ネット依存症のことがよくわかる本』等があった。

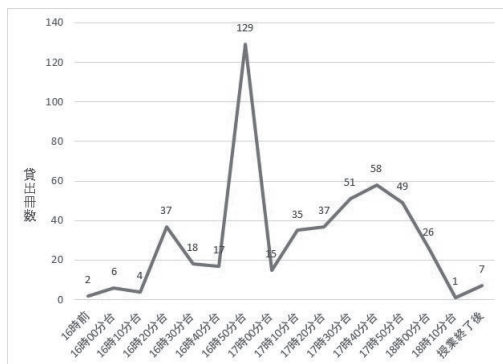


図 3 多読授業における電子書籍の貸出状況

また、課題を通じて、実際に電子図書館の利用を体験した学生たちに対し、アンケート調査を行い、電子

図書館の魅力や不便な点等を確認した。魅力としては、「本の置き場所に困らない」が 86 人で最も多く、次いで「図書館に行く手間が掛からない」が 67 人、「本を探す手間が掛からない」が 57 人の順となった（図 4 参照）。結果からは、インターネットを通じ、ICT ツールから利用可能な電子図書館の特徴が、そのまま魅力に繋がっている点が確認できた。

一方、不便な点としては、「紙の本を読むよりも目が疲れやすい」が 93 人で最も多く、次いで「バッテリー残量の心配がある」が 73 人、「開きたいページ（読み返したい箇所）がすぐ開けない」が 58 人の順となった。魅力とは逆に、ICT ツールを通じて利用するという電子図書館の特徴が、そのまま不便な点に繋がっている様子が分かる。

今回は、電子図書館を利用した多読教育を実施したが、他の場面でも電子図書館を活用するには、長時間に渡り、電子書籍を読んでも目が疲れにくいような、電子書籍向け端末の普及も必要となる。電子図書館を活用した多読教育に関しては、電子図書館上で読める課題図書を、より社会情報学部の教育に向けた電子書籍に変更した上で、来年度も引き続き、実施していきたいと考えている。

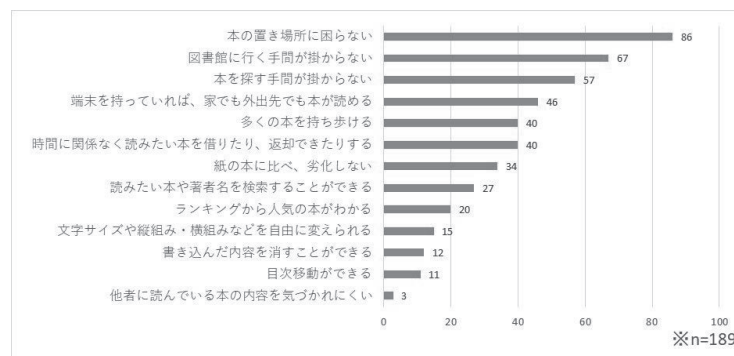


図 4 電子図書館の魅力

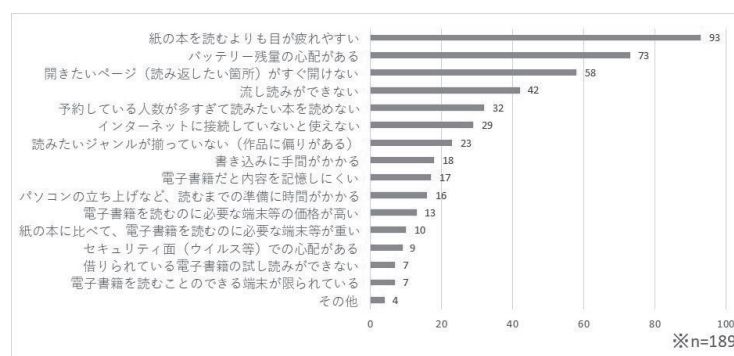


図 5 電子図書館の不便な点

2.2 電子図書館を活用したプレゼン教育

2017 年度に引き続き、「プロジェクト演習入門Ⅰ」及び「プロジェクト演習入門Ⅱ」のプレゼンテーションの学習のためにも、電子図書館を活用した。前期科目である「プロジェクト演習入門Ⅰ」は「基礎教育課程」と「プロジェクト遂行課程」の2つのフェーズに分かれている。そこで今回は、学外から来る審査員を前にプレゼンすることになる、プロジェクト遂行課程時に活用できるように準備を進めた。

具体的に用意したコンテンツとしては、過去のファイナルプレゼンテーションの発表資料を取りまとめた資料集、その様子を収めた映像資料等がある。加えて、2017 年度後期に追加した、パワーポイント作成時やプレゼンテーションの注意事項をまとめた、チェックリスト、プレゼンテーションの良い例と悪い例を示した映像資料、データ分析やパワーポイント作成に関する参考書籍等もある。特に、昨年度追加したコンテンツに関しては、昨年度の授業において、実際に利用した学生の8割以上から、参考になったという評価を受けている（図6参照）。

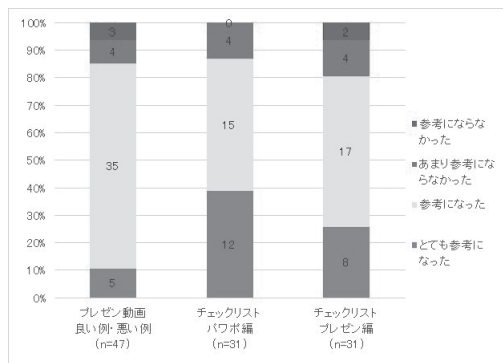


図6 昨年度追加したコンテンツの評価

学生には、これらのコンテンツが用意された電子図書館を中間発表の翌週（2018/6/12）～ファイナルプレゼンテーション（2018/7/10）までの約1か月間活用させた。この期間の利用統計データを分析したところ、学生の利用傾向が分かってきた。まず、利用時期に関してだが、実際に利用説明をした「6/12～6/18」が最も多く25回、次いで、ファイナルプレゼンテーション前の「7/03～7/09」が8回の順と

なった（図7参照）。授業中に、学生に対して利用を促すと利用されるが、その瞬間のみの一時的な利用に留まっており、継続的には利用されていない。

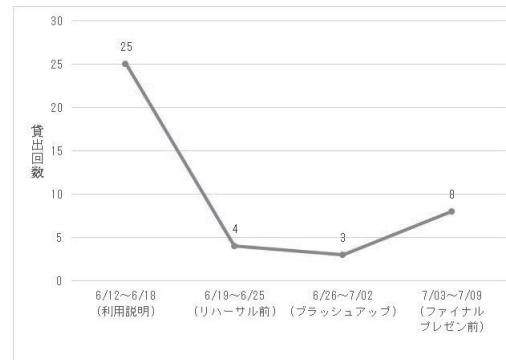


図7 プロジェクト演習入門Ⅰにおける電子図書館貸出回数

一方、コンテンツジャンル別貸出回数を見ると、最も多く貸し出されたのが「過去の資料集」で17回、次いで「過去の映像資料」の15回の順となった（図8参照）。学生は、過去の資料集や映像資料のような、自分たちの資料作成等に、より直接的に参考にできる、コンテンツを借りる傾向にあった。そのため、より良いプレゼンをするための参考資料となる、チェックリストは、あまり使われていなかった。

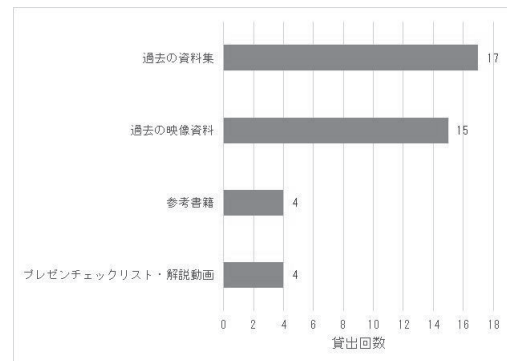


図8 プロジェクト演習入門Ⅰにおけるコンテンツジャンル別貸出回数

これらの結果を考慮すると、授業内での一度の説明だけでなく、例えば、リハーサル前にはチェックリストを活用するよう促す等、タイミングを見計らい、適切なコンテンツを利用するように促す必要がある。特に、後期科目である「プロジェクト演習入門Ⅱ」では、より良い成果を出すため、過去の同テーマの取り組み状況、関連する他授業の内容を参照する必要性に迫ら

れる場面も出ている。そこで、そうした場面においても、電子図書館を活用するように促している。今後は、後期分の利用状況も分析していく予定である。

2.3 研究支援ツールとしての電子図書館

今年度は、学術書を中心に扱う KinoDen を新たに導入した。2018 年 11 月時点では、15 冊分の書籍が導入済みである。現在は、更なるコンテンツの拡充を図るため、選書作業を進めている。合わせて、大学院生の研究活動のサポートツールとしても、試験的に活用している。実際に KinoDen を試用したところ、書籍の本文検索が可能のため、特定のキーワードを入力すれば、そのキーワードに関連する書籍を簡単に見つけられた。そのため、ある分野の状況を調査したり、関連資料を収集するのに役立ちそうである。また、必要な部分を PDF ファイルとして保存する機能もある。よって、実際に引用した資料を保存しておく必要がある論文作成時にも使えるようである。

一方、研究活動のサポートという観点では、現状では書籍数が少ないので、より役立つツールとするには、コンテンツを増やす必要がある。また、実際に自分が読んだ本や読みたい本を記録しておく機能も必要そうである。今後は、授業課題としても活用していくことで、その際の利用統計データの分析、利用者へのアンケート調査等を通じて、電子図書館 KinoDen の活用状況について、分析していく予定である。

3. 今後の実施方針

2018 年度は、電子図書館 LibrariE を活用した、多読教育及びプレゼン教育に注力してきた。そこで、今後は学術書を中心に扱う KinoDen の積極的な活用に向けた取り組みに注力していきたい。特に、初学者向けのコンテンツを中心に扱う LibrariE と KinoDen を並行運用し、社会情報学部全体をカバーできる体制を整え、学部生と院生や教員の電子図書館の活用方法の違い等を見ていくことを通じ、教育、研究支援全般を担うシステムとしての電子図書館の在り方を明らかにしたい。

【謝辞】

本研究で活用した電子図書館の導入に当たり、株式会社紀伊國屋書店、株式会社日本電子図書館サービスの皆様にご協力頂きました。電子図書館の運用に当たり、社会情報学部飯島研究室の皆様にご協力頂きました。また、社会情報体験演習、プロジェクト演習入門Ⅰ／Ⅱの講義を利用した実証実験に当たっては、同講義の担当教員の皆様にご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

なお、本研究は社会情報学研究センターによる研究プロジェクト「電子図書館を活用した多読教育およびプレゼン教育の研究」及び科学研究費基盤研究(C)「深い学習を促すデジタル教材—学習方略の選択への介入—」の成果の一部です。

参考文献

- 〔1〕 飯島泰裕，吹春俊隆，寺尾敦，上野亮「電子図書館を活用した多読教育の研究」『青山社会情報研究』第8巻，2016年，pp.67-74
- 〔2〕 飯島泰裕，吹春俊隆，寺尾敦，上野亮「電子図書館を活用した多読教育およびプレゼン教育の研究」『青山社会情報研究』第9巻，2017年，pp.59-62
- 〔3〕 青山学院大学社会情報学部「青山学院大学社会情報学部電子図書館」，2017年，<https://www.d-library.jp/agu/g0101/top/>，Accesseed.2018.11.08.
- 〔4〕 青山学院大学「青山学院大学 Kinokuniya Digital Library」，2018年，<https://kinoden.kinokuniya.co.jp/aoyamagakuin/>，Accesseed.2018.11.08.